教育出版

Educo エデュコ

学びのチカラで 人と社会を 未来へつなぐ

No.65
2024年

巻頭インタビュー p.2
自然写真家
松本 紀生（のりお）さん

知っておきたい教育 NOW p.4
①社会を変えられることばの力の育成を目ざして
②「できなさ」に固執する目を捨て、「のびしろ」を伸ばす目を

きょういく見聞録 p.8
①組織力を高め学校経営を充実させる校長の「器」
②ビジョントレーニングで子どもの学ぶ喜びを高める

Information 北から南から p.12

地球となかよしゼミナール p.14
【連載第3回】
「話す授業」を実現させる秘策

Front Runner p.15
【連載第1回】
「オンライン授業」が拓く
新しい博学連携のカタチ

ほっとな出会い p.16
写真家・芳賀ライブラリー 芳賀 日向さん

自分なりの美しさを アラスカに追い求めて

自然写真家 松本紀生（のりお）さん

やりたいことを探し求めて 悩んだ日々

1年の半分はアラスカにおもむき、一人でキャンプをしながら被写体を追い求める活動を何年も続けています。何か月も人間社会から離れて、大自然の中でキャンプ生活を送るのですが、特に孤独や不安は感じないですね。「こういう写真を撮りたい、こういう映像を撮りたい」という気持ちの方が勝っていて、とにかく一生懸命やりたいという思いが強いです。

写真家になろうと決意したのは大学時代の頃です。当時、「好きなことをやって生きていきたい」とは思っていましたが、自分が何を好きなのかもまだわかっていませんでした。何かを見つけないと先に進めない。将来何をやるのか、何者になれるのか、日々思い悩んでいましたね。

そんなある日、たまたま入った本屋さんで、星野道夫さんの著書『アラスカ　光と風』がふと目にとまり、「こんな仕事があるのか」と魅了されました。当時、椎名誠さんやカヌーイストの野田知佑（ともすけ）さんの本を読んで、自分は大自然に興味があるんだなとだんだんわかりかけていたのです。自然にしても南の方の暖かい自然ではなく、北の方の厳しいけれどその中にキラリと光る美しいものがあるような、そんな自然に興味があるのではないかと気づき始めたときでした。そういう考えが自分の中になかったら、星野さんのアラスカに関する本が目の前にあっても素通りしていたと思うのです。

己と対話しながら必死にもがいて、自分は何に興味があるのか一生懸命探している時期だからこそ出会えた。好きなこと、やりたいことが向こうから飛び込んできたわけではないのです。能動的に探さないと、なかなか本当に自分のやりたいことは見つからないのだと確信します。

結果に重きを置くのは もったいない

自然を相手にしているとよくわかってくるのですが、どんなにがんばったとしても、いい写真が撮れるわけではない。莫大な費用をかけて準備して、零下四十度のところで何か月も粘ろうと、撮れないものは撮れないのです。自然が相手なので、こちらの思い通りに動いてはくれません。それなら、結果に重きを置くのはもったいないと考えるようになりました。一生懸命やって撮れないのならしょうがないと晴れがましい気持ちでキャンプを終えることができて、前を向いて次のシーズンのことを考えられるのです。

中学生のとき、全校集会で先生が「一生懸命がんばってもちゃんと見える成果が出なかったら、それは努力が足りないんだ」と言ったことがありました。それを聞いたとき、結果が出なくても一生懸命がんばった本人が納得しているならいいではないかと強烈な反発心を覚えたのです。

結果より何より、己が全力を尽くしたかどうかが重要なのです。自然と対

PROFILE

自然写真家。1972年愛媛県松山市生まれ、アラスカ大学卒業。1年の約半分をアラスカで過ごしながら単独で動物やオーロラを撮影し、北米大陸最高峰デナリにも登頂。TBS「情熱大陸」「クレイジージャーニー」、アメリカ「National Geographic Channel」などのテレビ番組や、小中学校の道徳の教科書や高校の英語の教科書でも活動が紹介される。2022年には執筆文の英訳が大学入試問題にも採用。日本滞在中はスライドショー「アラスカフォトライブ」を全国で開催。『原野行』（クレヴィス）、『オーロラの向こうに』『つながるいのちうみ・もり・ひとの物語』（教育出版）他、著書多数。

峙するようになって、それが自分にとっての真実なのだと実感するようになりました。

人生の終わりに、「こんな結果を残せて、こんな賞をもらえたから、自分の人生は成功だった」と感じるわけではない。うまくいかなかったけど一生懸命がんばったとか、人の記憶に残るような仕事ができたとか、感謝されたとか、そういうことの方が最後に残ると思うのです。だから、あまり結果ばかりにこだわるのはもったいないと感じます。

●氷点下40℃を彩る光のシャワー

自分の心の声に耳を澄ませて

写真家としていちばんうれしいのは撮りたいものが撮れたときですが、何よりうれしいのは、日本に帰ってアラスカの写真や映像をいろんな人に見てもらえて、喜んでもらえることですね。よく小学校でフォトライブのイベントを行うのですが、写真が1枚切り替わるごとにワーッと歓声が上がります。目の前で自分の写真を喜んでもらって、拍手や笑顔をもらえて、本当に幸せだなと思います。

僕がアラスカで活動する中で感じたことは僕にとっては大事ですが、見てくれる人にそのまま伝えたいわけではないのです。僕が伝えたいことを吸収してほしいというよりも、心を開いて、あなたが今日何を感じるか、この写真、この映像、僕の話を聞いて何を感じるかということの方が重要なのです。自分の心の声に耳を澄まして、自分なりの何かを感じてほしいというのが最も願っていることです。何を感じてくれてもいいんです。子どもたちからよく感想文をもらうのですが、僕が言ったことをそのまま書いている子もいて、本当はもっといろんなことを感じているんじゃないか、もったいないなと正直思いますね。

昔フォトライブをしたとき、親子連れで参加したあるお母さんから手紙をいただきました。小学生の息子さんが帰りの車の中で、あんな誰もいないところで寂しいだろうに、写真もろくに撮れなくて、「松本さんがかわいそうだ」と泣き始めたんですって。僕は別に寂しくないし、かわいそうでもないんですけど、その子が他人の痛みを我がことのように感じて涙して、お母さんがそれを見たのがすごくいいことだと思っていて。その子が成長してこの先何があったとしても、お母さんはその子の優しい心根を知っているから、絶対その子を見限ったりはしないでしょう。そういう機会を作ってあげられただけでも、このフォトライブをやってよかったと思います。何を感じてくれてもいいというのはそういうことです。その子がそのときに感じたことが、その子にとっていちばん大事なことなのです。

どう撮るかは どう生きるかにも通ずる

零下四十度の氷河上で過酷なキャンプをしながら撮影したオーロラより、観光客がホテルの窓からスマホで写したオーロラの方が見栄えがよいこともあります。成果や効率面から考えるなら、僕のような極限まで命を危険にさらす撮影スタイルは決して勧められるものではないでしょう。ですが、「何を撮ったか」よりも「どう撮ったか」を大切にしたいのです。本当に大切なのは他人から与えられる評価ではなく、自分が自分に下す評価ではないでしょうか。

これが撮りたいという目標に向かって、自分なりに一生懸命がんばっていると、坂道を登っている過程で既に幸福感を得られるのです。目標を達成したときだけではなく、そこに到達するまでに、自分はがんばっているなと充実感を得られるのです。僕はそういう充実感を得たくて、この職業を選んだようなものです。自分が本当に綺麗だと思うものを一生懸命追いかけたかったんですね。それができているから、撮影の過程でどんなに苦しい思いをしても、文句を言ったら罰が当たると思います。

次のアラスカへの旅が再び迫っています。今回も己のもてる体力や知識や経験値を出し尽くし、できることは全部やって、「やりきった」という感覚をもって日本に帰ってきたいですね。

社会を変えられることばの力の育成を目ざして

愛知県岩倉市立南部中学校教諭
中村　夏帆

ポイント

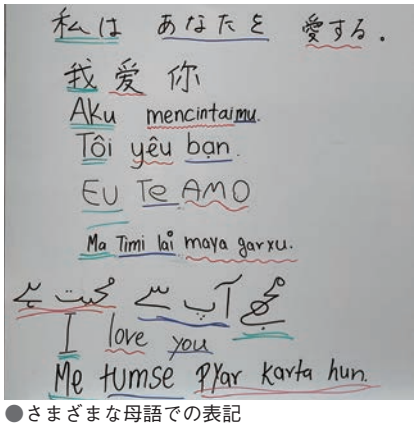
①国を越える移動や、複数の言語や文化への接触といった人生経験を、肯定的に価値付けする。
②外国につながる児童生徒を包摂する方法ではなく、「再包摂」するための授業内容の検討をする。
③日本語ができるようになることを超えて、社会を変えることばの力の育成を、日本語指導の目標にする。

できない生徒から、豊かな人生経験をもつ生徒へ

私は、日本語指導が必要な生徒が48名在籍する中学校で、日本語指導の担当をしている。

本校の日本語教室では、基本的に在籍学級の学びに合わせて指導項目を決定している。ある日、漢文の導入で「私はあなたを愛する」と板書し、生徒が母語でそれに訳を書き、主語・述語・目的語に色分けするという活動をした。すると、生徒たちは語順の違いについて、植民地の言語政策の影響、海洋国と内陸国の言語発達の違い、主語や目的語を省略できる言語の特徴等、さまざまな視点から考えを深めた。母国での学びや親から聞いた知識、日本での学びを豊かに結び、言葉による見方・考え方を働かせていたことがわかった。

このように思考できる生徒たちであっても、教師や同級生からは日本語ができず、助けるべき存在として語られてしまう。国を越える移動、外国の文化をもつ家庭から日本の学校文化への移動等、複数の文化や言語の間を行き来している生徒たちは、日本人生徒とは異なる経験を重ねて成長する。このような異なる人生経験を肯定的に価値付けし、授業の中に取り入れると、日本人生徒や教師が新たな見方・考え方をもつ機会となるだろうが、学ぶことが多い日々の中では難しい現実がある。



●さまざまな母語での表記

「再包摂」を意識した授業内容の検討を

在籍学級での学びが、外国につながる生徒の人生経験を肯定的に価値付けした授業とできるかどうか、私は「再包摂（リ・インクルーシブ）」が鍵だと考えている。

本校には、授業をユニバーサルデザイン化することで、外国につながる生徒を包摂（インクルーシブ）しようとする同僚がいて心強く思う。しかし、マジョリティ（日本人）によって作られた学びの中にマイノリティ（外国につながる生徒）を包摂するという視点では、マジョリティへの適応を強いることになる。そこで、双方が共にかかわることで、マジョリティによって包摂された学びの場から、マイノリティも含めて包摂し直す「再包摂」を意識した授業内容とすることを提案したい。このことを具体的に説明するために、日

本語指導での経験を2つお話したいと思う。

一例めは、国語の勉強で、戦争下に栄養失調で弟を亡くしたかたの手記を扱ったときのことである。インドネシアで小学校まで教育を受けた生徒は、初読のあと「全然わからない」と言った。その「わからない」は日本語についてではなく、第二次世界大戦は日本軍がインドネシアに来て現地住民に暴力を振るった歴史なのに、当事者である日本で、日本人がかわいそうな戦争だったと教えることが理解できないと言う。このような視点を教科の内容として計画的に取り入れることで、この手記が教科書に掲載された背景や日本人的な見方・考え方について考えられるようになり、マイノリティの人生経験が再包摂された学びの場となるだろう。

●「ここが変だよ日本人！」日本人への発信

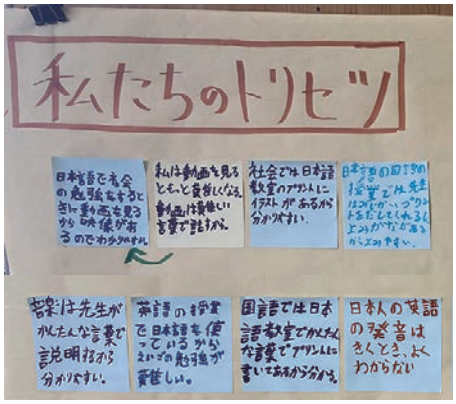
二例めは、公民でグローバル化と少子高齢化について勉強したときのことである。教科書ではグローバル化について学ぶページに、「工場で働く外国人」「外国人介護福祉士」「日本語教室で学ぶ子ども」の写真が掲載されていた。それを見たブラジル人生徒は「グローバル化じゃなくて、日本に子どもがいないから外国人がきたから、次の少子高齢化のページに写真を載せるべきだ」と発言した。外国人が来日するに至った理由や、教科書会社がグローバル化のページに働く外国人の写真を載せた経緯を考えるといった、再包摂化を意識した学びの場は、変化が激しい世界を生きる生徒たちにとって必要な場なのではないだろうか。

日本語指導は社会を変える ことばの力を目標に

日本語指導の目標は、日本人生徒と同じレベルの日本語をできるようにすることだと語られることが多い。しかし、再包摂化を目ざす日本語の学びの場では、外国につながる生徒が自分の人生経験を日本語で語り、さらに、社会を変えるためのことばの力の育成が目標となる。

社会を変えることばの力を目標にすると、ことばの力によって社会を変えられたと思う経験を、どのように日本語指導の計画に組み込めるかが課題となる。この二年間で、県の教育委員会や子ども家庭庁へのパブリックコメントの提出、NHKの番組プロデューサーへのコメントの送付、文化祭で外国人から見た日本の違和感の掲示、外国につながる生徒と共に学ぶためのトリセツの作成と、社会に向けて発信する活動を計画した。生徒たちは、それらの活動に取り組むことで社会の出来事を自分事として捉え、社会に伝えたいことを決め、その伝え方を話し合ったり、教師に質問したり、本やインターネットで調べたりしながら、社会を変えることばの力を高めていった。私は、生徒の取り組みから、社会を変えることばの力とは、文法や語彙に留まらず、わかりやすく伝えるための文章構成や説得力がある根拠の提示、相手を意識した丁寧な表現や読みやすい文字の書き方と多岐にわたることを知った。全ての活動で生徒が社会に訴えたことは、自分や親が日本で経験してきた苦労を後輩たちがしないで済むような社会にしてほしいということであった。それに対して、番組プロデューサーは返事を送り、県は報告書にコメントを掲載した。生徒たちは社会に聞いてもらえたという経験をし、社会を変えることばの力を伸ばしてきた。

最後に、前述したインドネシアから来日した生徒について紹介したい。小学六年生の三学期に来日したため、中学校入学時には日本語が話せず、自己紹介カード作成のために将来の夢を聞いても「ない」と答えただけだった。しかし、一年生が終わる頃に「先生、将来の夢が決まった。インドネシアの学校を日本に作りたい。だから、日本とインドネシアの大学で勉強する」と語った。パブリックコメントに外国人のための学校を作ってほしいと書いていたが、自分が後輩のために作ろうと決めたのだと言う。日本の学校で学ぶことがそれほど大変だということに心が痛むが、社会を変えることばの力を目標にした結果、外国人が生きることが決して簡単とは言えない社会を変えようとする生徒が育っていることに大きな期待感をもっている。



●「私たちのトリセツ」お互いを理解するために

「できなさ」に固執する目を捨て、「のびしろ」を伸ばす目を

広島大学大学院准教授
南浦　涼介

ポイント

①外国につながる子どもたちの「つまずき」を見る以上に「のびしろ」を見ることを大切にする。
②合理的配慮のもと「アコモデーション」を重視する以上に、教育の目的や内容も考える「モディフィケーション」を大切にする。
③とりわけ外国につながる子どもたちの多言語や多文化的な経験や視点は、①②を考える重要なヒントになる。

外国につながる子どもってそもそも「課題」？

2010年代の後半ごろから、外国につながる子どもたちをめぐる空気は、それまでの「そんなこと知らなかった」から一挙に変化し、外国人児童生徒の教育というと「とても大切なことですね」と言われることが随分増えてきた。

一方でこうした社会の中で関心が増えるほどに、子どもたちを「課題をもつ子ども」――具体的には、日本語ができないこと、日本の学校に適応しない子ども、日本社会を知らない子ども――と捉えることが半ば状態化したようにも思う。

つまずき思考とのびしろ思考、教育とはどちら？

前稿の中村先生の実践でもあるように、外国人児童生徒は、その「外国」とのつながりから来る多様な力を本来はもっている。外国人児童生徒にかかわる実践によく教師や学校が「多言語・多文化」という言葉を用いているのは、そこに「課題」をもって子どもを捉えているのではなく、むしろそうした文化と文化、言語と言語の間を移動する経験から生みだされるものの見方や考え方、捉え方といった認識のあり方やそこから生みだされる力を「武器」と積極的に捉えていこうとするからである。

子どもたちの課題をつまずき優先で捉えていく発想をつまずき思考（欠損的思考：deficit model）といい、もっているはず（ただしさまざまな理由で発露できていない）の力を捉えていこうとする発想をのびしろ思考（資本的発想：asset/resource model）という（表1）。

こうした思考は、単に子どもたちの捉え方の問題ではなく、教師が

表 1

	つまずき思考（deficit model）	のびしろ思考（asset / resource model）
問題の捉え方	問題を子ども個人に置く 子ども個人の解決するために個人に対して指導・支援をする	問題を子どもの周り（環境やしくみ、社会）のありかたに置く 周りのありかたや発想を変えていく
子どもの捉え方	欠損的に捉える 欠落・能力の不十分さ わからなさ・できなさ	資本的に捉える 資源・能力の可能性 実はもっている・オモロイ子
「障害」との接点	つまずきを「障害」と捉える傾向 障害を医療的に解決しようとする傾向	つまずきを「バリア」と捉える傾向 バリアを社会的に解消しようとする傾向
カリキュラムとの関係性	アコモデーション（技術的調整・合理的配慮）との関係性	モディフィケーション（教育の内容や目的の変更、全体の変更）との関係性
大人のはたらきかけの発想	わからないことがわかるように できないことができるように	この子がうまくいかないのは 周りのありかたや、はたらきかけの発想にあるのでは？

行おうとする実践にも大きな影響をもっている。例えば、外国人児童生徒に対する欠損的思考としてよく出てくるものに「①漢字ができない」「②てにをはがおかしい」「③学習言語ができない」などがある。しかし、日本語は英語のアルファベットの26文字に比べて、圧倒的に文字の種類も量も多い。当然習得には大きな時間がかかる。膠着語（こうちゃくご）という日本語の特性から助詞の使い方は複雑で、使いこなすにはそもそも、たくさんの時間をかけた使用経験やコミュニケーション経験が必要だろう。少なくとも①②は「日本語の最も難解な面でありもとより時間がかかるもの」である。それを「できなさの根拠」に置いてしまうのは時期尚早である。③の学習言語も、それ自体定義が曖昧なものであるにもかかわらず、ときに「語彙を知らない」と排除の根拠として使われる（本来授業とは「学習言語ができないから参加できない」のではなく「授業を通して学習言語を得ていくもの」のはずだ）。

それよりも「ほかにできるようになったこと」を大切に見てほしい。また、この両者の思考の違いは、教師の日々の指導にもかかわってくる。「できなさ」「つまずき」を前提にものを考えていくようになると、「せめてこれだけは…」という意識がはたらくようになり、結果、できないことができるようにと、ドリルや練習プリントによる「書字教育」の世界に埋没するようになってしまう。そうではなく「子どもたちの可能性や伸びしろ」を見ることによって、「この子どものいいところを伸ばすにはどうしたらいいだろう」という本来の先生方がもっているはずの教育としてのはたらきかけのゾーンが現れてくる。

「わからないことがわかるように」「できないことができるように」からの脱却

さらに、何のための教育かということも重要だ。どうしても「つまずき」からはじまる授業は「わからないことがわかるように」「できないことができるように」と、いかに「平準」な場所にこぼれおちた子どもを戻していくかという発想になりがちになる。

しかし、本来教育とはそうではなく、子どもたちのよさや可能性を見すえ、それを伸ばしていきたい方向目標と捉えながらそこに向けて伸ばしていくことが大切になる。例えば、先の中村先生の実践では、子どもたちの多言語や多文化とかかわる人生経験は明確に「力」「可能性」となっていた。そこから「社会を変えることばの力」を方向目標として捉え直し、さまざまな教育的活動の中身を、そこに向けたものに確信をもって行っている。「ここが変だよ日本人」活動も、「子ども家庭庁へのパブリックコメント提出」活動もそうであるし、そもそもブラジル人生徒が、グローバル化について学ぶ教科書のページの外国人の写真を見て「これはグローバル化じゃなくて日本に人がいないから、次の少子高齢化のページに写真を載せるべきだ」と話すことに価値を置いた（つまりこれは評価の目線でもある）こともそうである。

表1にあるように、本来インクルーシブという発想には「アコモデーション」と「モディフィケーション」の発想がある。アコモデーションは、教育の内容や目的の変更を伴わない環境調整による既存のカリキュラムへの参加方略を重視している。合理的配慮の意味とも近い。例えば、外国につながる子どもたちの教育においてよく提起される「理解支援」や「表現支援」として、視覚化や操作化、体験化が強調されたり、「やさしい日本語」を用いることや、リライト教材が提示されたりするが、これらはアコモデーションの具体だといえる。一方で、既存の「教育の内容や目的」にはふれず、その外側の環境調整を主軸にしたものであるため、「全体」が変わらずに小手先の調整行為にもなりやすい。

一方で、モディフィケーションというのは、教育の内容や目的の変更を伴う。単なる調整行為ではなく、積極的に子どもたちの特性を「個性」と捉えて授業の内容に組み込み、それによって子どもたちが伸びていくことを大切にする。

分離すれども切り離さず、子どもたちのよさを全体で伸ばす

日本では差異のある子どもを「アコモデーション」として支援する発想は強くある。一方で、「モディフィケーション」のような視点は弱い。たしかに中村先生の取組は「日本語教室」という分離した場であるが、そこでは「支え」の発想よりも「伸ばし」の発想が強いモディフィケーション的側面に根ざすものである。「分離すれども切り離さず」に子どもたちのよさを伸ばし、在籍するクラスや学校全体での成長につながることこそが、大切な視点になるのではないだろうか。

この分野ではよく「支援」という言葉を耳にする。が、それが「つまずきの解消」「アコモデーション」を指すなら、本当にそれは支えなのか。今一度考えたいところである。

言葉だと捉えている。この言葉にふれたとき、誰しも「リーダーの器」とは？　が頭をよぎると思う。別の視点で捉えると、「名選手が、必ずしも名監督にはならない」が表しているように、一人の教師として培い高めてきた資質能力に、リーダーの「器」が加わってはじめて、職員のやる気を高め経営を充実させる校長になれる、と考え自己研鑽に励んできた。

なお、「器」を辞書で調べると、①物を入れるもの、容器。②人物や能力などの大きさ、器量。③道具。と記されている。器が小さな自分自身を鼓舞し、少しでも大きくするための方策が「校長としての10か条」である。10か条の中で、文言だけではわかりづらい次の３つについて、私の思いを簡潔に紹介する。

❷ 教頭に感謝の言葉を掛け称える

教頭の職務には範囲がなく際限がない。教頭を経験した先生はわかると思うが、教頭が汗を流して動き回ったり、関係機関と電話等で対応したりしているとき、職員のほとんどは授業中である。従って、教頭の本当の苦労を職員は知らない。教頭がたとえ年上であっても、教頭を兄弟姉妹のように思い、その働きについて教頭に感謝や労いの言葉を掛けたり、職員には見えない動きについて職員に知ってもらったりすることは、校長の重要な役割の一つだと考えている。

❸ 職員一人一人を認めほめる

職員一人一人に能力の差はあれど、一人一人に必ずよさがある。職員一人一人を兄弟姉妹や息子、娘のように思い、一人一人のよい言動を見逃さず、それについて具体的にほめることが、個々の自信につながり、意欲を高め、その過程で教師力を高めることにつながると考えている。如何なるときも決して叱ったり怒ったりせず、ひたすらよさにふれるように努めてきた。また、職員全体については、校長だよりや職員会議など全体の場でほめるようにしてきた。もちろん、個々の成長を阻害している課題に関しては、「～してみてはどうだろう」などと提案型で本人と確認し合い、次の一歩につなげるようにしてきた。

❿ 祖父の気持ちで児童に接する

近年、校長にもさまざまな児童が声を掛けてくる。自分が頑張ったことを伝えたり、土日に家族と過ごして楽しかったことを伝えたり、あるいは、担任の先生のよさについて伝えたりするときは、孫のように（私は未だ孫はいないが）これでもかというくらいに共感したり称賛したりすればいい。しかし時には、担任からちょっと注意されただけで、「校長先生！　担任の○○先生を今すぐにクビにしてください。」と叫びながら校長室に入ってくる児童もいた。その際に、ゆったりと構えてそれこそ親に叱られた孫に接するように、「どうしたの？」と声を掛け、じっくりその児童の言い分を聴くことで、児童の心を解し、ある程度落ち着いてきたら、「前に、担任の○○先生が、◎◎さんが～を頑張ったってほめていたよ。」などと伝えて、ちょっと心を揺さぶり整えてあげるようにしていた。

できれば、10か条全てについて私の思いを伝えたかったのだが、紙面の都合もあるので３つに絞ってふれさせていただいた。

今は、36年間私にいろいろと気付かせ育ててくれた校長先生をはじめ、同僚、そして保護者や地域の皆様に感謝の気持ちをもちつつ、管内の各学校で頑張っている校長を元気にし、教職員と児童生徒を笑顔にする取組を、所員と共に推進している。そして、これまでの職場でもそうだったように、職員一人一人を家族のように思いながら、「校長としての10か条」をベースにして、一人一人の笑顔を大切にした経営を楽しんでいる。

なお、ちまたでは、部下を家族のように思うと「組織がダメになる」や「部下から舐められる」など、家族として「思う・思わない」について、二項対立的に捉える方がいるが、それこそが「器」の問題ではないかと私は考えている。

きょういく見聞録①

組織力を高め学校経営を充実させる校長の「器」

私は、これまで36年間の教職生活において、教務主任を7年、教頭を2年、校長を8年、指導主事や主任指導主事、班長、室長、所長を10年経験させていただいた。その中で教務主任と教頭という立場で、力量があり個性豊かな6名の校長先生の下で働かせていただいたことが、自分なりの校長像をいろいろイメージしたり、校長として重視すべきことについていろいろ考えたりすることにつながった。その6名の校長先生の経営から学ばせていただいたことを基に、校長になったときに意識して実践してきた私なりの「校長としての10か条」を紹介したい。今は、所長として、管内の各学校で汗を流している校長の役に立ちたいと考え、校長時に実践してきたことを、機会を見つけては伝えるようにしている。

沖縄県教育庁那覇教育事務所　所長　宮國（みやぐに）　義人（よしと）

⊙教職員も子どもたちも「やーにんじゅ」

平成28年3月31日に義務教育課での職務を終え、翌日の4月1日に校長としての第一歩を踏み出した浦添市立浦城小学校は、児童数が1,062名の大規模校だった。もちろん、教職員数もそれなりに多く、年度当初の最初の催しである新旧職員の「初顔合わせ」では、職員室前方だけでは収まらない椅子が側方にも並べられ、そのような中、私を含め33人の新職員（その当時は幼稚園の職員も一緒）は、BGMと旧職員の手拍子に迎えられ、椅子に腰を下した。そして会の冒頭に、職員室の天井から吊された小さなくす玉が割られ、その中から、色とりどりの小さな紙とともに、「わったー　やーにんじゅ」と書かれた可愛い垂れ幕が下がり、新旧職員全員の柔らかな笑顔の中、拍手が沸き上がった。その時、拍手をしながら82名の職員一人一人の顔を一瞬で見渡し、改めて教務主任や教頭のときにまとめた「10か条」が頭をよぎった。そして、園児163名、児童1,062名のために共に汗を流してくれる教職員一人一人を、今日から「家族」のように大切にしながらいっぱいほめ育てなくては、という思いが強くなった。その時以来、校長として勤務した3校（浦添市立宮城小学校、那覇市立銘苅小学校）で、その思いを大切にしながら、教職員と子どもたちの笑顔に包まれ、学校経営を楽しませてもらった。

※「わったー　やーにんじゅ」とは沖縄の言葉で「私たちは家族」を意味します。

⊙私が意識して実践した「校長としての10か条」

❶ 夢や目標を語り合う（言葉や文字にすると互いに気持ちが前向きになる）
❷ 教頭に感謝の言葉を掛け称える（2番手を大切にすると組織が機能する）
❸ 職員一人一人を認めほめる（絶対に叱らない・怒らない）
❹ 児童のよさを児童と共有する（価値付けすることでその気にさせる）
❺ 数値と向き合う（実態から目を逸らさず、改善策を試すことを楽しむ）
❻ 保護者・地域との連携を大切にする（地域あっての学校とのスタンス）
❼ 経営全般について適宜語り合う（一人一人の参画意識を高める）
❽ 児童の未来に責任をもつ（可能性を信じて、粘り強く関わる）
❾ 職員の声に耳を傾け学ぶ（これこそリーダーの器）
❿ 祖父の気持ちで児童に接する（担任の思いを的確に伝える）

⊙組織はリーダーの「器」以上にはならない

経済界で多くの実績を上げた稲盛和夫氏やプロ野球界で成功を収めた野村克也氏など、多くのリーダーが口にしてきた言葉である。要するに、成功を収めた者が口にすることができる言葉で、一人のリーダーの器そのものが、組織を構成するメンバー個々の意欲の向上に直結し、それが組織力としてあらゆる結果につながるということを断言する

集中力・注意力…集中が切れやすい、つまずきやぶつかりが多い、整理整頓が苦手…

これらのつまずきに対して、大人は、「何回も練習しよう！」「もっとよく見て！」と促したり、目の前でモデルを見せたりしています。しかし、もっと手前の眼球の動きや、情報の処理の段階に問題が隠れている場合があります。まずは、そこにアプローチするのがビジョントレーニングです。

ビジョンの状態を確認し、楽しくトレーニングを行うことで、眼の機能が改善し、子どもの「できた！」「やりたい！」が増えていきます。個人差はありますが、1日5分、週に4日程度行うことで、十分に成果が期待できます。

◎全ての子どもにとって取り組む価値がある

このトレーニングのよさは、発達的に課題がある児童のつまずきの改善だけでなく、全ての子どもの学習面や運動面の向上につながることです。

トレーニングの一つ一つは、シンプルかつ短時間にできるものなので、抵抗感なく取り組めて自分の成長をすぐに実感できます。内容を教科学習に関連させたものにすると、授業の導入や終末に無理なく取り入れることができます。

図1【学校全体で取り組んだ例の一部】

①眼の体操（2分間週3回）　②ビジョンプリント
③眼と体のチームワーク

	Aパターン →	Bパターン →	Cパターン →	Dパターン
低学年	まねっこ鏡	お年玉キャッチ	後出しジャンケン	おはじきカーリング
中学年	国旗カードゲーム	おはじきカーリング	地図帳地名探し	矢印体操
高学年	お手玉キャッチ	算数フラッシュカード	国旗カードゲーム	国語辞典言葉探し
若竹学級	おはじきカーリング	まねっこ鏡	国旗カードゲーム	お手玉キャッチ

図2は、先ほど紹介した小学校で、1年間でどれだけ「読み」がスムーズになったかを調べた結果です。読み速度の平均タイムが大きく縮むとともに、その結果は負荷の大きい横読みの方に顕著に表れました。トレーニングによって、より困難なことが改善されたことがわかります。低学年や特別支援学級での伸びが大きいことから、早い段階での取組が効果的であると言えます。子どもたちから「教科書がすらすら読めるようになった」「黒板を写すのが早くなった」「音符が追えるようになった」という評価がたくさんありました。

また、形を正しく捉えるという点においても、つまずきの大きい児童ほど成果が出ています。図3の枠を比較してみると、約半年で見え方が変わっていることがわかります。この児童は、漢字テストの点数も大幅に上がり、授業態度も明るく意欲的になりました。

図2【成長の様子　学校全体】

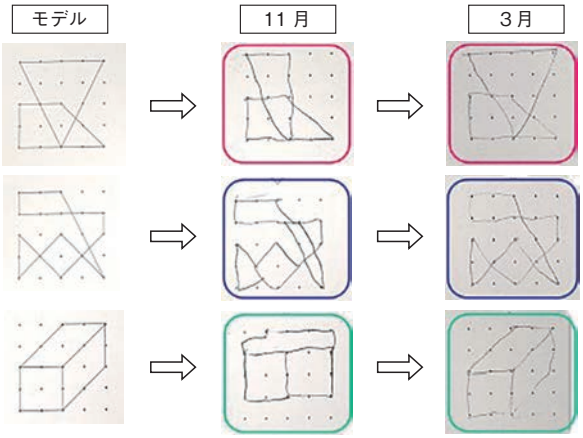
DEM（読書時の跳躍性眼球運動を測定するテスト）

※数値は学年平均、単位は秒

	2022年11月 縦読み速度	2023年10月 縦読み速度	タイム差	2022年11月 横読み速度	2023年10月 横読み速度	タイム差
現2年生	46.7	37.1	−9.6	54.8	42.9	−11.9
現3年生	36.6	33.5	−3.1	45.7	38.0	−7.7
現4年生	32.8	29.6	−3.2	37.6	32.8	−4.8
現5年生	30.3	27.5	−2.8	34.4	29.9	−4.5
現6年生	29.0	23.3	−5.7	30.3	25.9	−4.4
若竹	56.6	44.6	−12.0	62.0	42.1	−19.9

※縦読みは数字の並びが同間隔、横読みは間隔が不規則

図3【成長の様子　A君　2年生】



◎子どもたちの明るい未来のために

現在、ビジョントレーニングにより、「思考する、やる気を出す、感情を抑制する、意思決定する」などを司る前頭葉が活性化することがわかってきています。このことは、ビジョンが単なる眼の機能を高めるだけでなく、子どもたちが抱える課題に対して、無限の可能性を秘めていると言えるのではないでしょうか。

町田市では、今年度も複数校が、学年・学校単位でビジョントレーニングを始めており、継続的な支援を行っています。夏季休業中に設定した希望参加型の研修会は、2日で定員数に達しました。他の自治体からの問い合わせや研修要請も増えてきています。今後も、ビジョントレーニングの理解者・実践者を増やし、子どもの未来を明るく希望あるものにしていくために取り組んでいきたいと思います。

※ビジョントレーニングについての問い合わせは、紹介した学校ではなく、町田市教育センターにお願いします。

きょういく見聞録②

ビジョントレーニングで子どもの学ぶ喜びを高める

視覚（ビジョン）は、さまざまな動き、言語、学習、コミュニケーションを支える五感覚の一つで、生活場面においては欠かせないものです。しかし、今、この視覚がうまく機能しないためにさまざまなつまずきを起こす子どもが増えています。この視覚を整えていくことがビジョントレーニングですが、その認知度はまだまだ高いとは言えません。積極的に学校教育に取り入れることで、全ての子どもにとっての未来を変えるものになります。

町田市特別支援教育・人材育成アドバイザー・元町田市立町田第四小学校校長
公認心理師・学校心理士
ビジョントレーニングインストラクターPRO　　丸　節子

◉子どもたちを救いたい……からの出発

令和４年度の文部科学省の調査で、通常の学級に在籍している学習上・生活上で特別な支援を必要とする児童・生徒の割合は、8.8％という数値が出ました。このうち、通級による指導を受けているのは１割程度で、多くの児童・生徒は、発達課題に応じた個別指導を受ける機会がないまま、通常の学級において学習の不適応を起こしています。

一方で、教員側の指導力の向上も課題となっています。発達障害等に関する専門的な知識、アセスメントの技術、個に応じた適切な指導方法など、教員が習得すべきことは多岐にわたっています。にもかかわらず、現状では、研修・研鑽のための時間や場の設定が難しい状況があります。目の前の子どもにどう対応すればよいのか……、教員からの相談件数は増え続けています。

このような現状に対して、「効果的なアプローチの開発」「アセスメントや指導方法の体系化」が急務であると考えました。子どもたちをつまずきから救いたいと模索を続ける中、４年前にビジョントレーニングに出会いました。学べば学ぶほど、学校教育や家庭教育に取り入れる必要性を強く感じました。

ビジョントレーニングは、欧米諸国では80年以上の歴史があります。日本においては、数年ほど前から、療育の現場やプロアスリートの世界において少しずつ活用されるようになりました。一方、学校においては、通級指導学級等の一部の教員が、対象の児童・生徒に対して実践しているというのが現状です。

町田市教育センターでは、３年前から、特別支援学級等の教員を対象にビジョンや感覚統合に関する研修を毎年設定しています。

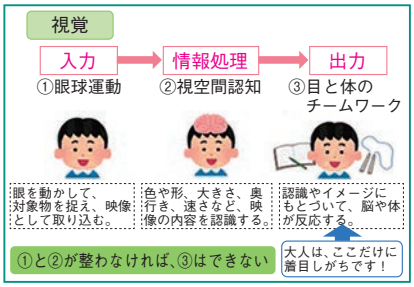
昨年度２月、町田第二小学校でビジョントレーニングの研究発表会を実施しました。特別支援学級だけでなく、全ての学級で取り組んだこと、教科授業の中にも取り入れたことという点においては、全国初と言えるでしょう。他県、他地区等からの参加者も多くあり、ビジョンへの関心が高まりつつあることを実感しました。

「見る力」を高め、学ぶ喜びを実感できる子どもの育成
～ビジョントレーニングを活用した指導の工夫～

◉なぜ、今、ビジョントレーニングが必要なのでしょうか

人はさまざまな感覚を使い、必要な情報を得ながら生活をしています。その中で、視覚（ビジョン）のはたらきは80％以上にも及びます。

視力が「静止した像がどれだけはっきり見えるか」に対して、**視覚**は、情報を入力してから、体で反応する出力の段階までを指します。①と②がうまく機能しないと、③の出力でさまざまなつまずきとなって表れます。



【例】

読む場面で…読み間違いをする、読み飛ばしをする、滑らかに読めない、言葉を置き換える…

書く場面で…板写に時間がかかる、文字がマスからはみ出る、形が整わない、漢字が覚えられない…

体を使う場面で…はさみが上手く使えない、紐結びやボタンどめができない、ボールキャッチができない…

全国各地のさまざまな取組を紹介します。

東京　中学生の新しい放課後の活動「四中ゆないと」
～農業×ビジネス×地域＝中学生の成長

日本女子大学講師　根本　裕美

「四中ゆないと」は東京都三鷹市立第四中学校の生徒有志が、六次産業のビジネスに挑戦する放課後の活動です。地域団体「まちラボみたか」の運営サポート、地域の人々の支援を受けながら、短い放課後を上手に使って活動しています。

JR 三鷹駅から十数分の所にある第四中学校の地域は商店街の賑わいもあり、都市農業を行う畑も広がる地域です。そこで暮らす農家や専門家、大学の先生や学生、製菓工房、商店街のかたなどさまざまな町の人々とかかわり、自分たちの手で作物を育て（今年度はさつまいも）、それを使った商品の開発や販売、事業報告など、話し合いながら試行錯誤し、一年間かけて実践していく「四中ゆないと」には、学校だけでは得られない学びがあります。

作物がうまく育たない、収穫した後どのように製品にするのかわからない、販売ルートはどうするのか、原価に見合う価格設定は…など、常に新たな「課題」が目の前に現れてきます。

三鷹市は、公立中学校１校と小学校２校を小中一貫の「学園」とし、そこを基盤としたキャリア・アントレプレナーシップ教育を教育施策としており、「四中ゆないと」も「子どもたちの多様で豊かな新しい放課後づくり」に向けた取り組みの一つとして、2021（令和３）年度から３年間の支援のもとに活動を行ってきました。４年目の今年は「自走」する年。初年度から活動を支えてくれた一期生も高校生になり活動から離れましたが、「学園」の小学校から入学した１年生と、進級し逞しさを増した２・３年生からのアイデアで、畑開きに小学生を呼ぶ、市場調査をするなどの新しい活動も始まりました。失敗、不安、出会い、成功、焦り、達成感などから得る経験や真正の学びは、町とのかかわり、多様な働き方や生き方を考えることにつながっています。地域の大人もそこに力を得て、共に未来を拓く仲間として、支え、育んでいます。

北海道　メタバースを活用した不登校支援の取組

帯広市教育委員会

―「ひろびろチョイス」開設―

不登校児童生徒が大幅に増加する中、GIGA スクール構想による一人一台端末の整備と、文部科学省による不登校の出席扱いの拡充が進んだことを受け、令和５年５月、オンライン上の仮想空間に教室開設する「ひろびろチョイス」を導入した。

―コンセプトは３つのC―

（1）Choice（選べる）

児童生徒が自己選択・自己決定できる環境を設定する中で、児童生徒の社会的自立を促していきたいと考えている。オンラインの強みを生かし、「入退室の時間」や「入室後の学びの内容」や「場所」を自分で選ぶことができるよう配慮している。

（2）Connect（つながる）

関係機関との連携による「つながり」を意識した学習コンテンツを提供している。オンライン会議システムを使った学習支援や、集合形式によるリアルな体験活動（料理体験等）を、地元フリースクールが担っている。また、オンライン、リアル双方のスタイルで実施されている、クラブ活動や遠足を通じて、児童生徒のつながりも生まれている。これらの出会いが「新たな居場所」につながっているケースもあり、手ごたえを感じている。

（3）Cheer（応援する）

不登校児童生徒のニーズが多様化する中、「地域全体で考える姿勢が重要」との考えのもと、各フリースクール等の強みを生かした、多様な支援の提供の一つとして、メンター制（伴走支援）を導入している。フリースクールからの一人一人の児童生徒へのかかわりは、活動の後押しとして大きな力となっている。

―今後に向けて―

子どもたちの背景はさまざまで、子どもの数だけ必要な支援は違う。課題は支援リソースの不足である。外部との連携は、不登校支援だけでなく学校の教育活動全般においても重要な視点であるため、今後も学校・関係機関等との連携強化により、社会的自立を促していきたい。

香川　特別支援、人権・同和、教育相談を礎に「心の教育・生命の教育」を推進

高松市立高松第一小・中学校長　永岑（ながみね）　光喜（こうき）

本校は、四国最初の施設一体型小中一貫教育校として2010年に開校しました。特徴的な枠組みとして、従来の６・３制と、Ⅰ期（１年から４年）、Ⅱ期（５年・６年・７年）、Ⅲ期（８年・９年）による４・３・２制の融合があり、期別に「めざす子ども像」を定め、義務教育９年間を通した教育を推進しています。

―「心の教育」と「生命の教育」の推進―

急激に変化する時代の中で、学校教育では、児童生徒が生涯にわたり、自他の生命を大切に思い、共に尊重し合いながら生きていく意識を育むことが重要です。かけがえのない生命を尊重する心を育成する取組は、豊かな心を育む取組でもあり、本校では、期別に目標を掲げ、重点指導内容として取り組んでいます。

★「心の教育」カリキュラムの中で「生命の教育」に焦点化しての教育研究、実践と取組

★人権教育と命の教育を推進

★心のキャッチボール

具体的には、以下の取組です。

(1)「ゲストコーチ・ゲストティーチャー」による講話〈自殺予防〉（「いのちのせんせい」「乳幼児とのふれあい体験」「学ぼう手当て！つなごう命！AED救命」「しあわせマウンテンをめざして」など）

(2)「学年サミット」〈生命の尊厳〉〈道徳〉

(3) 校内「こども SOS」〈SOS の出し方・受け止め方〉

小中一貫教育校の校長として、特別授業を行い、小学校での素地教育に尽力しました。これが種となり、担任や主任の教職員が中心となって育て、さらに中学校につなげることで、教育効果や価値の高い持続可能な小中一貫教育の発展をめざします。

静岡　民間の力でニッチを

ミライサポートプロジェクトいわた
磐田市前教育長　村松　啓至（ひろし）

地域部活動移行への支援と不登校傾向のある子どもたちやその保護者のかたがたの支援を行っています。支援の一つとして、ペアレントメンター研修や発達障害についての研修も行っています。このニッチに向けて、NPO法人「ミライサポートプロジェクトいわた」を地域の皆さんと協力して立ち上げました。

地域部活動移行については、磐田市では、教育委員会内に地域部活移行グループが設置され、そこを中心に今年度からスポカルという地域部活が始動しました。しかし、地域クラブの指導者の高齢化が進み、中学生の地域の指導者は少ないのが現実です。そこでNPO法人として地域のかたがたと協力してできることは、指導者の発掘と育成であると考えました。現在、ジュビロやブルーレヴス、大学、各団体、教育委員会と協力して、地域部活指導者育成講座を開催しています。魅力をいかにこれからの指導者に伝えていくか、そして現場へとつなげていくかが、ポイントです。

また、不登校等いろいろな悩みをもつ親御さんらとの茶話会「コーヒーの会」も行っています。珈琲屋さんの一室を借りて、いろいろな話をしました。その中で「一日中子どもと一緒にいるため働けない、やっぱり勉強が心配」、などの声が聞こえてきました。そこで始めたのが「ミライサポート教室」、不登校傾向のある子が集まる不思議な空間、学び直しの空間です。親御さんの力をもとに、子ども、指導者とのつながりがポイントです。

今年度から「拡大版ミライサポート教室」を始めます。生きにくさを抱えた子どもたち、育てにくさを抱えた親御さんたちにライフスキル、カウンセリング、ゲームとのつき合い方、知育ゲーム、キャリア教育などを提供し、生きにくさ、育てにくさを一歩超え、ともに前に進んでいきたいと考えています。さて、ニッチに手が届くでしょうか？

地球となかよし ゼミナール

【連載第３回】（全３回）

「話す授業」を実現させる秘策

一般社団法人
アルバ・エデュ代表理事　竹内明日香

これまでの号で、話す力を高める授業を導入した学校で入試結果や学力が飛躍的に向上したため、多くの自治体や学校から教員研修にお招きいただくようになったお話をしました。

先生の４割は話す授業が実施できていない

昨夏に教員研修で訪れた学校の先生がたから得られたアンケートの結果では、「今後の授業において、子どもの『話す力』の育成を重視していきたい」との回答は97％でしたが、他方「そのような授業は実施できていない」とお答えになった先生がたが４割強にのぼりました。

■調査概要

調査期間：２０２３年８月～９月

調査方法：アルバ・エデュが実施した教員研修終了後にアンケート

調査実施者：三菱ＵＦＪリサーチ＆コンサルティング株式会社

調査対象：アルバ・エデュが実施した教員研修の受講者／小学校、中学校の教員等４８０名（有効回答２３８名）

参考：https://www.atpress.ne.jp/news/389938

その理由は、「子どもたちが話す内容を考えるのに時間がかかって取り組みにくい」「授業をしたくても学級全員への支援が難しい」と、従来から寄せられていた意見と同様のものを多数いただきました。

問いかけアプリ「スピスタ」の開発へ

そこで、子どもたちの端末を通じて個別最適な問いかけをするアプリを開発できないかと考えました。生成AIを利用し、弊社団が10年に亘り培った授業時のファシリテーション手法を基にした声掛け事例を、先生がたに代わってアプリが問いかけるというものです。開発にあたっては昨年度から日本財団に助成していただき、今年度は新たに文部科学省の「次世代の学校・教育現場を見据えた先端技術・教育データの利活用推進事業」に採択され、ようやく「めざせ！Speak Upスタジアム（通称「スピスタ」）」の実証バージョンが完成しました。

■実証結果

スピスタをこの６月に宇都宮短期大学附属中学校・高等学校の生徒１３３名に使用してもらったところ、95％の生徒が授業で役に立ったと回答しました。

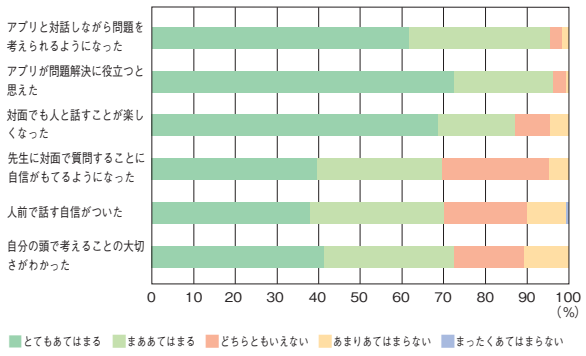
また、アプリと対話しながら問題を考えられるようになった、問題解決に役立つと思えたというアプリ利用に関してポジティブな回答が90％を超えただけではなく、対面でも人と話すことが楽しくなった、人前で話す自信がついた、自分の頭で考えることの大切さがわかったなどの項目で７～９割がポジティブな回答を寄せてくれました。

先生がたからは「生徒が思考を深める問いかけ方を学ぶことができた」等の感想をいただきました。また、本来であれば個別の支援が必要とされるところ、アプリ利用により中学１年34名×使用時間30分、中学２・３年99名×使用時間20分で、合計50時間分、教員との対話を肩代わりしたことになります。教員のゆとりを創出する仕掛けでもあるわけです。

今後に向けて

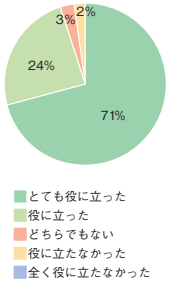
これまで、学校や教育委員会を回り授業や研修を行い、教員、子ども、保護者それぞれに向けて書籍を出版し、また産業界も巻き込みシンポジウムや講演の機会をいただいてきました。面接入試用の副教材の監修をした他、新たに英語教科書のSpeaking部分のお手伝いをする予定もあります。今回お話ししたアプリ等のICTも支えに、教育課程においてスムーズに話す力が高められる授業が行われることを祈念しています。

これは教育界単体で進めるものではなく、次世代を担う子どもたちのためにすべての大人が関わるべき総力戦だと思っています。すべての子どもが一人残さず話せる日が来るまで―「世の中は変えられるそのためにプレゼンがある」子どもたちに伝えているこの言葉を、自分も肝に銘じて歩んでまいります。



アプリの利用へのポジティブな回答が90％を超えただけでなく、対面での対話や人前で話すことに70％前後の生徒がポジティブな変化があったと答えた　n=133人

●アプリを使ったことで、次のような変化はありましたか？



アプリが授業の役に立ったと答えた生徒が95％に上った

●今回の授業で、アプリは役に立ちましたか
n=133

竹内明日香（Aska Takeuchi）
旧日本興業銀行にて国際営業等に従事後独立。日系企業の海外向け情報発信やプレゼン等を支援する傍ら、２０１４年に（一社）アルバ・エデュを設立。自治体や学校でアドバイザーを務める。著書に『すべての子どもに「話す力」を』（英治出版）、『思いを伝える「話す力」』（Ｚ会）。東京大学法学部卒業。

Front Runner

【連載第１回】（全３回）

「オンライン授業」が拓く新しい博学連携のカタチ

埼玉県川口市教育委員会
教育総務部　文化財課
井出（いで）　祐史（ゆうじ）

川口市では現在、博学連携の取組の一つとして「オンライン授業」を実施している。zoomを活用して資料館や史跡現地からライブで行う歴史解説である。子どもたちはタブレットや教室の大型テレビでこれを視聴し、疑問や質問は随時マイクやチャットで受け付ける。本事業を始めた令和２年度５月から令和６年６月現在までに、延べ563校、６万３千人以上の小・中学生が、この「オンライン授業」に参加した。

本事業は、コロナ禍の逆境から生み出された。令和２年度４月、学校は臨時休業、資料館も休館。例年行っていた、資料を学校に持ち込んで解説する出前授業や資料館への社会科見学も中止となった。そこで翌月５月、当時はまだ学校にWi-Fiや１人１台端末もなかったが、既存のインターネット環境を利用して本事業を開始した。あれから４年―。これまでの実践から得られた、「オンライン授業」の利点は、以下のとおりである。

❶ 見える・聴こえるから、わかる・興味が湧く

資料を用いて解説をする場合、リアルでは全員が指摘している箇所を同時に見ることが難しい。屋外や工場など周辺環境によっては声が聴こえにくいこともある。見えるもの、聴こえる音、光や熱、触れるものなど情報量が多く、集中できない子どもも少なくない。

しかし、オンラインでは画面を通じて全員が同時に、間近に見ることができる。解説の声もよく聴こえるから、自席で落ち着いてメモを取ることさえ可能である。だから話がわかるし、もっと聴きたい！実際に見てみたい！　と興味が湧く。さらに、長期欠席や保健室登校、感染症に伴う出席停止でも、オンラインなら授業に参加できて、一緒に学ぶことができる。

●市内に残る鎌倉街道を案内

❷ リアルでは行けない場所もOK

先生がたが社会科見学を計画する上で、現地の安全面や受入れ可能人数、大型バスの費用や配車場所、移動にかかる時間などを考慮した結果、見学を断念しなければならない場合がある。しかし、「オンライン授業」なら費用も時間もかからない。これまでリアルの見学では見せられなかった、一般の立ち入りを禁止している場所や多人数では入れない場所、危険を伴う場所もカメラを伸ばせば見せることができる。

●鋳物工場からの中継

❸ 文化財の保護と活用が両立でき、業務負担も最小限

「オンライン授業」では、資料を持ち歩く必要も、団体で遺跡に立ち入る必要もない。だから資料が劣化したり、誤って遺跡を踏み荒らしたりする心配はない。また、講師の移動時間や準備にかかる手間が少ないから、業務負担も少ない。実際、資料館内からオンラインを実施する場合、開始数分前まで自席で別業務に専念できている。

いま、「オンライン授業」は市内に広がりを見せている。実施希望校は年々増加し、資料館だけでなく図書館内を案内する「オンライン図書館」も始まっている。これからも本市のすべての子どもたちの学びのために、新しい博学連携のカタチを追究していきたい。

Educo No.65 2024年9月30日発行

伝統を守る　後継者を育てる

ほ・つ・と・な・出・会・い

写真家・芳賀ライブラリー　芳賀（はが）　日向（ひなた）さん

中止が続く日本の祭り

私は、かれこれ40年以上、国内外のお祭りを撮影・記録してきました。今回は、国内の祭事を例に、伝統を守り続ける意義や難しさを考えます。

今年の2月、岩手県奥州市の黒石寺（こくせきじ）で千年もの間継続してきた裸男が「蘇民袋（そみんぶくろ）」という福袋を争奪する凄まじい戦いの祭り「蘇民祭」がその幕を閉じました。住職によると「正月から準備をするのだが、檀家は高齢化で現在8軒のみで、後継者もいない」とのことでした。福袋の中に入っている数百本の木片の護符はヌルデの木で、冬山の山頂近くに登らないと見つかりません。護符を作るのは地元の男に限られています。参加する裸男も地元よりも全国各地から集まる方が多いので、「何のためのまつりだ」と檀家が疲弊で悲鳴をあげたのです。最後の祭りは全国からマスコミ51社400人が集まり、壮絶な取材戦となりました。

広島県竹原市で2月に行われる「二窓（ふたまど）の神明祭」は櫓の上で太鼓を打つ女装した青年の成年式です。雑誌に紹介しようと思い、現地に電話をすると「もう紹介できない。地元には成年式を迎える青年がいなくなってしまった」と寂しい声が聞かれました。全国各地で中止となった理由はさまざまですが、高齢化、過疎化に、コロナ禍が追い打ちをかけました。

「伝統」か「後継者」か

愛媛県松山市で5月に行われる「櫂練（かいね）り」は、平安時代後期の瀬戸内海の河野水軍（海賊）にルーツをもつ海上神輿渡御を護衛する「櫂練船」です。船の舳先で揺れをものともせずに少年が櫂を大きく振り踊りますが、昨年祭りの危機が訪れたのです。櫂を振る小学生の男の子の数が足りないのです。祭礼委員長は祭りの中止か、伝統を変え、女の子を参加させるかで悩み抜き、自分の娘二人を櫂振り役として登場させました。「伝統を変えてしまった、これでよいのか」と彼の心に責任が大きくのしかかりました。答えはまだ出ていません。

花祭の伴鬼と著者

愛知県奥三河地方14地区に鎌倉時代から伝わる11月から1月にかけて行われる霜月神楽の「花祭」。明け方に山の神の化身である威風堂々とした「榊鬼（さかきおに）」が登場します。深夜0時に小学生の長男だけが稚児として舞うことのできる「花の舞」が行われます。東栄町御園地区は人口72人。花の舞を舞える男児が2006年にいなくなってしまったのです。そこで登場したのが、父親が「山見鬼（やまみおに）」役の4歳の双子の娘たち。初めての女の子とあって話題を呼び、アマチュアカメラマンのアイドルとなって大人気となりました。同地区では、東京都東久留米市との親交を結び、東久留米市内でも花祭が行われ、その地の若者が御園の花祭に参加しています。中には御園で結婚にこぎつけ、後継ぎの男子を儲けた家もあります。東栄町月地区では、祭りの主役榊鬼役は厳格な世襲制で代々榊（さかき）屋敷という家柄に生まれた男子と決まっていました。しかし2008年に榊屋敷は跡取りができず消滅。地区の青年男子から榊鬼を選ぶことになったのです。これが大当たりで、現代の若者に榊鬼は仮面のヒーローでかっこいいのです。榊鬼役に憧れる青年が祭りに多く集まるようになりました。

長崎県長崎市高浜は534世帯の町で、男性も女性もが相撲をとる相撲の町として知られています。ここで200年間続く奉納相撲で、9月に行われる「高浜八幡神社秋季大祭」は、立派な土俵が作られ、祭りの日の相撲は我が子、我が旦那の応援で熱気をおびます。祭りは小学生男子の33番による神事相撲から始まりますが、2018年に異変が起こったのです。神事である33番相撲に出場できる男の子の数が足りないのです。地区の役員会では女の子を加え33番という神事の形を守るかどうか、悩みました。結論は神事は男の子だけ、33番でなく20番で行いました。これからも議論を重ねて行くでしょう。

宮崎県串間市で行われる「市来古式十五夜柱松神事・火祭」では運動会の玉入れのように火のついた藁玉（わらだま）をカゴに投げ入れます。過疎高齢化で祭りの担い手が減り、祭りの準備ができなくなりました。この危機を救ったのが震災を逃れ、移住してきたサーファーたちです。それまではよそ者扱いされていたサーファーたちが祭りに手を差し伸べ、見事に融合し、祭りを継承したのです。その他にも全国各地でボランティアの祭りのお助け隊も生まれてきました。

現代は震災、疫病と続き、祭りの行方が大きく変わり始めています。これらの事例のように、どこの地域も自分たちで考え、その答えを導いています。「伝統」をとるのか「継承」していくのか。その答えは重いですね。

2023年に女子の櫂振りが登場した櫂練り

芳賀　日向（はが　ひなた）
1956年長野県生まれ。祭り写真家。米国西イリノイ大学文化人類学科卒業後、40年に亘り、日本、世界の祭りを撮る。訪れた国は48カ国、日本の祭りは1500以上。写真展「世界のカーニバル」、「被災地の夏祭り」他。ダイドーグループホールディングス「日本の祭りフォトコンテスト」審査委員長。2022年より文化庁伝統文化助成事業カメラマン。民俗学会理事。公益社団法人日本写真家協会・監事、出羽三山神社山伏名「陽晃」。

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

◆宮川彬良さんの「あらゆる分野のあらゆる局面で、0と1のどちらをスタート地点と捉えるかは非常に大きな問題です。そこに何らかの主体性があるものは『1』なのです」という指摘は、子どもの評価にもつながるもので、いろいろ考えさせられました。
◆伊藤氏貴氏の論考、「守り方」という視点に共感しました。現在の子どもたちの状況を分析され、どう言葉を守るかというもので、最後の「あらかじめ生徒に考える時間を十分に与えることだ。（略）授業では熟考を重視したい。」が重い言葉である。
◆全国の退職教職員が、不登校対策に立ち上がってほしいと存じます。わが市は昨年1月20日にスタートしました。

学びのチカラで　人と社会を　未来へつなぐ

教育出版は、無限の可能性を秘めた「学びのチカラ」を教科書という形で世に送り出し、子どもたちの成長に貢献してきました。
これからは学びの「場と機会」を、家庭へ、地域へさらに社会へと広げていきます。 学びのチカラで「自ら問い、考え続け、行動し、社会を創っていく人」の成長を支えながら未来へとつないでいく。 そのような次代の教育をリードする企業でありたいと考えます。

教育出版

教育出版は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています

発行所　教育出版株式会社　発行者　伊東千尋
〒135-0063 東京都江東区有明3-4-10 TFTビル西館
内容について　Tel.03-5579-6554　Fax.03-5579-6574
配送について　Tel.03-5579-6546　Fax.03-5579-6548